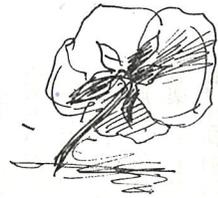


# ラグビー留学記



坂田好弘

ニュージーランドについての知識は、ラグビーが世界一強くて国技であるということしか知らなかった。ラグビーを始めた頃、そして僕自身ラグビーのとりことなっていた学生時代、そして興味を持つようになった国ニュージーランド、この頃の夢は一度で良いからラグビー王国で走ってみたいという願ひでした。この夢が三度までも叶ったのです。最初は全同志社のメンバーとして、去年は全本の一員としてニュージーランドに遠征し、世界最強のラグビー王国を肌で感じ土を踏み、豊かで美しい景色を見、人々の誠意に感激して帰国したものでした。

わずか一カ月ばかりの遠征でさえ、多くの素晴らしい経験と多くの勉強ができました。

そしてますますこの国に興味を持つようになり昨年四月、バッグにラグビー用具をつめ込んで南半球のラグビー王国へと旅立ったのです。

ニュージーランドの四月は紅葉の始まる時期で、また「ラグビー・シーズン」が始まる時でもあります。そして、今まで静かだった街が急に活気づきます。街中のスポーツ店は色とりどりのジャージを店先に飾り、靴屋はラグビー・ブーツの大安売りです。そして、新聞・雑誌は連日ラグビーの記事を載せ、また、人々の話題はラグビーへと移って行きます。この頃からニュージーランドの人たちの生活はラグビーを中心に活動し、そして九月の終わりまでラグビー中心の生活が続

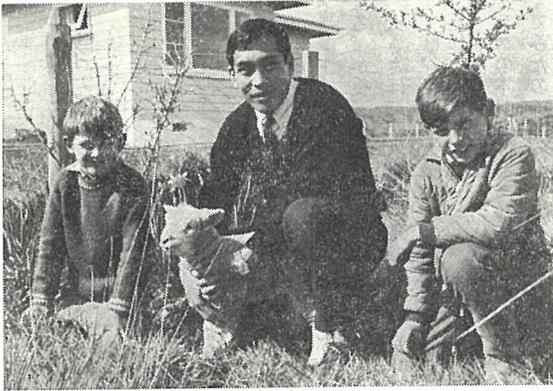
くのです。

僕が五カ月間籍を置いたのは、伝統ある「カンタベリー大学」のラグビー・クラブでした。ここでラグビーを学び、チーム・メイトと語り、また、多くの人たちに接することができました。

目的は、ラグビーを学ぶことでした。でも彼等に混じってプレーすることは、想像以上に激しく厳しいもので、何度か挫折しそうになりました。こんな時、励みになったのはニュージーランドの人たちの暖かい思いやりや美しい自然の姿でした。

この国の美しさは、多くの船乗りの人たちに「地上の楽園」と呼ばれているように、とても素晴らしいものです。人口二八〇万人、面積は日本の約四分の三、羊の数六〇〇〇万頭、この国の人たちの生活は自然と融和しています。我々からみれば平和で美しいこの国も若い人たちには余りにも平和すぎるらしく、刺激を求めてアメリカやオーストラリアへと出て行きます。でも結局は、この国へ戻ってきます。

ニュージーランドを代表するものは、**RUGBY BEER & RACING** といわれ、これ



(ウエリントン郊外の牧場で)

らはニュージーランドの特徴を端的に表わしています。人々はラグビーや競馬に熱中し、それらを話題にビールを飲みながら、何時間も話し合ふのです。

ニュージーランドの人たちがラグビーの話しをしているのを見ると、こちらまで楽しくさせられます。こんなことがあります。ニュージーランド代表である「オール・



(マウント・クックで)

ブラックス」と「ウェールズ」の国際ゲーム（これをテストと呼びます）の日、人々は直接グランドへ行ったり、ラジオを聴いたりして、ニュージーランド中の機能が一時停止します。この日ばかりは仕事をしません。また、何百マイルも離れた街からもこのテストを観戦に来るのです。観客は七万人も集まりません。勿論、ホテルは満員で、一カ月前から

予約しておかなければ泊れない状態です。

ですから素晴らしいプレーヤーが、どんなに育ちます。ニュージーランドが世界に誇れるもの、それはラグビーなのです。ですから、シーズンになるとニュージーランド全体がラグビー中心に動いているようにさえ思えます。事実そうでした。日本人の「ラグビー・プレーヤーが何不自由なく生活できたのも、ラグビーという共通の話題があったからかも知れません。

そして、ただラグビーをしているというだけで、いたるところで歓迎され歓迎されました。つくづくニュージーランドはラグビー王国だと感じさせられました。ラグビーを学ぶために四月に日本を離れ、それから五カ月間、ラグビー以外に学んだことの方が多く、ラグビーに関係ないと思われたこれらのことが、今ラグビーを続けていく上に非常に役立っています。ニュージーランドは、ただラグビーが強いと思っていた何年か前、そして今ニュージーランドの国の美しさ、素晴らしい人間性に接し、ラグビーの本当の強さの本質を見つげることができたように思います。

(昭和四十二経卒・近鉄ラグビー部)

# 教会とステンドグラス

徳力彦之助



私は現在、旧約聖書の創世期をテーマに、ステンドグラスの制作を始めてもう一年半になる。が後一年はかかる筈である。

大きさは二四米×一〇米で、一枚の窓絵としては、世界最大級のものと同確信する。

私はこの作品を造るにあたって、ステンドグラスの本質とはどんなものであろうかと考えてみたのである。

話の順序として、私のステンド歴というものを少し紹介させてもらおう。

学生の頃、先輩が、ドイツで習ってきたという作品をみせられたのが、そもそのやみつきで、三十年余り前、自分の家を建てた時、英国中世期風の家を設計、そのとき入手した三十枚ほどのステンドグラスを、応接、書斎、食堂、廊下から風呂場、便所までは

込んだ。

それ以来、朝起きてから、夜、寝るまで、私の家族は、この百年ほど前の英国製ステンドグラスの中で生活しているのである。やがて私は、私なりのステンドを造るようになり、またステンドに関する文献も多少はもつようになった。

私の所有する数少ない蔵書の一つに「カンタベリー大寺院の古代ガラス絵」という一書がある。

第一次大戦中、ドイツの爆撃から、ガラスを守るために全部とりはずしたのを機会に、この研究をまとめたものである。非常に貴重な文献で、日本には数部しかかきしていない筈で、私も直接英国から取りよせた。著者は、バーナード・ラッカム氏。出版元はカンタベ

リー寺院友好協会である。

彼は、その序説の中で「十一・十二世紀のガラス絵技術の急速広範な発達によって、大寺院の窓絵は、その絵画様式を確立する機会を迎えたと見做されるようになった。また、これは、他の如何なる工芸の力によって達せられたよりも、また、聖書のすべての物語りや比喩の手段によってよりも、疑いもなく卓越した方法を以て、キリスト教々義の本質を示し出す機会であったとみていい」と書いているのである。

ステンドグラスが、古代の教会にとって必要欠くべからざる装飾のための手法であることは、多少ともステンドグラスに関心をもつ人々は、だれでも知っていることであって、いまさら説明するまでもない。しかしラッカム氏の如く、聖書のすべての物語りや、比喩の手段よりも、キリスト教々義の本質をステンドグラスが示しておるということは、どのように解すべきことなのであろう。

私にも過去、キリストや聖母像などのステンドを造った経験はある。しかし、残念なことには、私はまだ本当のキリスト教々義というものを、充分理解していないし、まして

や、私如きものの造ったキリスト像や、その他のすべてのステンドグラスが、キリスト教々義の本質と関係があるなどは、夢にも考えてみたこともなかった。とすると、ヨーロッパの教会のステンドグラスというものは、われわれが造ったり、また考えているものと、本質的に異質なもののなか、それともラッカム氏が、あまりにも、その研究対象が見事であるために、これこそキリスト教々義そのものであるかの如く錯覚されたものだろう位に受取ったのである。

いずれにしても、そのステンドグラスのすばらしさというものについては、彼の言葉を文字通り受取っていいということは、ヨーロッパの古代の窓絵を見物してきた人々にとっては、異存のないところであろう。ただ、氏



シャルトル寺院 1150年 受胎告知

の言の如く、キリスト教々義そのものとして受け止めたが、ただの観光の目的だけで眺めてきたかのちがいはあったであろうと思う。

観光客にとつては、このことはどちらであっても一向に問題でないにしても、ステンドを造る側にとつては、このことは単なる批評としては聴きのがせないものをもっている。われわれが、ヨーロッパのそれを真似て喜んでいる間は、それでもいい。しかし、ヨーロッパのステンドが教義そのものであるとすれば、われわれ日本人はそれを造ることができないものなのか？ 一体、その教義の本質とは何なのであるうかという疑問が生じてくる。

彼は、別のところにこうも書いている。

「後世の中世ガラスにおいては、この技法は一層計算された洗練さを以って使用され、ときにはそれを過度に使用した結果、立体的な浮彫りの効果を生み出し、それが、材料の特異な性質とほとんど両立できないまでに至っている。

ガラス屋は、透過した光が工芸の媒体であり、彩色ガラス、鉛およびエナメル絵具はそれに比べれば、本質的なものではないとい

う、もっとも重要な事実への視野を失い始めた」

要するに、ステンド造りの技術が進歩したので、彩色ガラスの造り方や、鉛のリボンの組合せの技法、顔や衣服の影などを描きあらずエナメル（注：ヨーロッパステンド特有の技法で、最近のアメリカンスタイルのものにはこの技法はない）絵具の使い方などの枝葉末節にとらわれて、ステンドの本質である透過する光で表現するというのを忘れておることを指摘しているのであるが、これはどういう意味かというと、ステンドグラスという芸術は、一般の工芸的なガラス製品とちがって、いかに立派なステンドグラスでも、これを机上に置いて觀賞しては、決して美しいものとはいえないもので、これは、必ず枠にはめて、外部からの光を透過させて眺めてこそ、始めてその真価を觀賞し得るもので、このことを抜きにして、技術の進歩を自慢にしてみても、それはステンドグラスの本質には、何のプラスにもならないと、彼は考えるのである。

このことを、別な例で説明しよう。ここにすばらしいカラーの芸術的な映画のフィルム

があると仮定しよう、それが如何に立派だといってみても、フィルム自体は觀賞の対象とはならない。

映写されたものをみて、始めて、これは立派だと認識することができるのである。われわれが立派な芸術として、みているのは、実はただの一枚の白いスクリーンなのである。

しかし、そのスクリーンに写し出される映像が、この場合本質なので、フィルムの造り方がどうであれ、それは本質とは関係の薄いものである。

もっと具体的にいうと、最近モントリオールの万国博などで問題になったマルチ・プロジェクション（多面投影）を例にとると、もっと、その関係はつきりする。これは二個以上の映像を、一個のスクリーンの上で組合せて、ある種の芸術的映像を表出しようとするもので、ここでは、個々のフィルムの造り方などは、もはや問題でなく、スクリーンに表われた映像だけが、その本質なのである。

すなわち、ステンドグラスの本質ということとは、教会内にあつて、眼を見張つて、高い窓にはめ込まれたステンドを見事だなどという観光客を対象としたものではなく、会堂の

床にひざまづいて神に祈りをささげるとき、キリストや、マリヤの衣服の赤や青が、七彩の光のシャワーとなつて、床や壁や、信者自身のベールなどを染め出した胸にうける信者自身の幸福感、神々に対する親近感こそが、ステンドグラスの本質で、これに比べれば、窓絵の美しさ、物語りのめでたさ、作者の名前や技術の良否などというものは問題にならないと思えるのである。

これをいいかえれば、ステンドとは、その透過した光のあたる空間こそ本質であつて、その内部にある諸々の莊嚴物や、司祭者の言葉、宗教音楽といったものよりもまず信者の心を捕まえてはなさないものだといふことができると思ふのである。

が、それにしても、それがキリスト教々義の本質だという意味が、永い間、私には理解し難いことなのであつた。

私は、今度の作品に着手するに先立つて、あらためて、聖書の一行一句を熟読してみた。恥かしいことだが、クリスチャンでなかつた私は、永い間、聖書を手にする機会がなかつたが、今度は多少事情がちがつてきた。

「天地創造」というテーマを、どうまどめ

るかについて大へん苦心したのであるが、この話は今は、おあづけにしておく。

私は、旧約聖書の中から、二つのことに注目するようになった。

まず、創世期の一番最初に「元始に神、天地を創造たまへり、地は定形なく曠空くして、黒瞳淵の面にあり、神の靈、水の面を覆たりき、神、光あれと言ひたまひければ光ありき、神、光を善と観たまへり」

つまり神が始めて言つた言葉は「光あれ」であつた。

神は第一日に、光あれと云つた後、第四日目に、日と月とを造られた。そして日には昼を、月には夜を司どらせた。

旧約聖書、当初の思想として、神エホバの意志は、太陽の存在以前に光があり、その光は、神の要求にしたがつて生じた。

いいかえれば、神のみ心は、光を通じて、われわれの前に現われたと考へていいということである。

次に注目したのは、第九章であつた。地上に大洪水が起り、すべての生物が死に絶えたときに、ノア夫婦と、その家族、一つがはずつた生物などは無事にアララテ山に到達し

た。そのとき、エホバ神は、虹を雲の裡に表わした。この虹も、光である。

「我、わが虹を雲の中に起さん、是、我と世との間の契約の徴なるべし。虹、雲の中にあらん、我之を觀て、神と地にある都て肉なる諸の先物との間なる永遠の契約を記念せん」虹はエホバの御思召の表現とみていい。以来、信者は、虹をみるたびに、それをエホバの示現と感じ、敬虔な気持でこれに對してきたと思う。

私はそうした経験を持たないが、私にも、私なりにやはり、二、三虹に對する思い出がある。

今から五十年ほど前のある日、その頃はまだ、私の家の周辺が全部青田であった。

近郊を散歩の途上、三重に重なった虹をみて異様な感動をうけたこともあった。また、これも近辺で、山を背影とした虹の一方の橋脚の部分が地上に突き当って、とくにその部分が鮮明であった。

橋脚の部分に、二、三の民家が含まれていて、虹色に浮き上ったその人家が実に美しく、もしも私が幸運にも、その人家にいたとしたら、その家は、壁も柱も虹色に光って、

その家の人達は、どれほど、幸福感に充たされるであろうかと、まだ若く、ロマンチストであった私は、実際にあり得ない空想を、いま以って忘れかねているのである。こうしたことは、恐らくすべての人々にとっても、何等か記憶にあることであろうと考える。

もしも、私がつと早く、聖書のこの部分を熟読していたら、私の虹に對する感慨も、もっと内容の豊富なものとなっていたであろうと考える。残念なことに、虹は、われわれの欲するとき、いつでもみることができないのである。

ところがヨーロッパのキリスト教徒は、十世紀以来、いつでも、彼が欲するとき、虹、すなわちエホバの思召しに接することができるようになったのである。

彼等が教会に行く。そこには高い窓から、いつでも虹色の光のシャワーが降りそそいでくるのである。

たった一度でいい。虹の橋脚の部分に住んでみたいという、私のほかない望みは、ここでは毎日、現実としてくりかえされるのである。

ステンドグラスの発明は、たぶんキリスト

教徒自身ではないかも知れない。しかし、彼等がその虹色効果を知ったとき、エホバの言葉を直感したと思う、そしてさっそくこれを教会建築にとり入れた。

ここで、もう一度、ラッカム氏の言葉を読みかえしてみよう。

「これは、他の如何なる工芸の力によって達せられたよりも、また聖書のすべての物語りや、比喩の手段によってよりも、疑いなく卓越した方法を以て、キリスト教々義の本質を示し出す機会であったとみていい。」という言葉を、私はいまでは、まぢがいけないものと感じているのである。

しかし、すべての教会のステンドグラスが、キリスト教々義の本質を表わしていると考えることには疑義があるのである。

ラッカム氏も指摘した如く、中期ガラスにおいては、技法が一層洗練されたために、材料の特異な性質と、ほとんど両立しないとされているように、中期期、すなわち十七世紀頃になると、ヨーロッパステンドは、衰退の一路をたどったのである。

十九世紀に入って、アメリカで、オーパルセントグラスなどという(六十九頁下段へ)

# 同志社と民芸運動(一)

## 西邨辰三郎

そもそも民芸運動とは、次に述べるような

物事を総称するのである。一には、何が正しい美なのか、いわば美の標準を具体的に表示する設備機関の設立や維持運営のこと。例えば、東京駒場の日本民芸館をはじめ、鳥取、倉敷、松山、松本、高山等の民芸館。二には民芸に關しての啓蒙・宣揚・講演・見学・探訪・書物雜誌等による説明等。例えば柳宗悦先生の膨大な名著述や蒐集、既刊工芸、月刊民芸などの出版。三には、天才的個人作家の自覚による民芸的作品の制作や、彼等、多くの職人達への正しい指導、指導者と

職人達との協団組織、残存民芸の保存・改良。さらには新生活に即応すべき新作民芸の制作指導の諸機関。すなわち善良なる生産者

・問屋・小売業者の組織等、美を守るべき経済的機構の維持促進に關する仕事であつて、例えば、鳥取の吉田璋也博士提唱によつて設立された「たくみ工芸店」などである。

民芸運動とは、これら三者がそれぞれ相互に密接な關係を保ちながらも、それぞれの機能を十分に發揮すべき運動の総称といつてよいと思う。

さて、これらの新しい工芸美の運動は、いずれの分野においても、あの偉大にして温情深い東洋美の発見者、世界的宗教哲學者で



(次頁写真は柳宗悦氏・68歳)

あつた、故柳宗悦先生のすばらしい直観と、思索・創造による文化的遺産であつて、実に前人未踏の美の新世界運動であつた。

美の王国の市民権を獲得したいと志望するものは、まず柳先生を学ばねばならぬと思う。また、柳先生の賞されたものが、理論ではなく、直下に分るものでなければならぬ。柳先生によつて、雑器または下手物(げても)と呼ばれていた無数の美しい実用品が、民芸―民衆的工芸―と改称されたのは、大正末期で、柳、河井、浜田三氏による新造語である。近頃は民芸という言葉があたかも流行語のようになり、中にはおよそ民芸の主旨に反するような品々が、民芸品という名で販売



されたり、変な料理を民芸料理と言ったりしているのは、まことに沙汰の限りで、情けないというはおろか、憤りをさえ覚える。民芸という言葉の内容が散漫になったり、逆に窮屈に受けとめられたりするのは、柳先生の本旨にもとる。美を真に愛する者は、もう一度

柳先生のもとへ帰らねばならぬし、上述のどとき私の理解による民芸運動の根本義についても、先生の名著書をさらに熟読玩味しなければならぬと思うのである。

いま私が、同志社と民芸運動というような表題を掲げたのは、大きな意義と豊富な内容をもつ民芸運動の種

蒔きが、ちょうど大正の末から昭和の始めにかけての先生の在洛時代、すなわち同志社大学及び女専の講師時代に行われたことによると、とくに宗教教育の面において、先生が信と美の不可分を説かれたのにいたく打たれたことによるのである。

私は学生時代、音楽を通じてまず兼子夫人を知り、ついで宗悦先生の示す美

に無条件に打たれる結果となった。先生の名声に従ったのではなく、先生の提示される美に共感し、先生の運動の主旨に共鳴したからである。法学部の学生ではあったが、柳さんのキリスト教に関する書物は常に手中にあった。「神に就いて」「宗教的奇蹟」「宗教とその真理」「信と美」「工芸の道」などは、私の心からなる愛読書であった。その後、先生の民芸運動の発展とともに、それら運動の背骨として一貫している他力易行の思想や、「法と美」「無有好醜の願」「不二美の願」等の名著により、私どもは、先生の工芸美学と宗教哲学が、もっとも深い根底において、仏教に結びついている一円融境の世界を理解することができたのである。すなわち信と美の一致について、先生の思想がキリスト教的というよりは、むしろ仏教的、とくに真宗の教えに近づいてゆくことを発見した。もとより先生は中世キリスト教、とくにその神秘思想における権威者であり、民芸美の世界とキリスト教が背馳しているなどとは、ゆめゆめ考えられなかったとしても、美の世界において、現代におけるある種のキリスト教派に対しては、鋭い批判を試みられた

ことも事実である。それらのことから、同志社で育てられた私どもは、旧新約聖書が、美の問題とどのようにかかわり合っているか、同志社はキリスト教教育に美の問題をどのようにとり入れているかということをもみずから問い正したい願ひもあって、あえてこのような表題を掲げたのである。

## 二

さて、私は、歴史的にも正確な資料を得たという念願から、まず友人であり、民芸運動の初期から現代にいたるまでの事情に通じている黒田辰林（木工）兄を誘って、初秋の一夕、元同志社大学法学部教授、現弁護士能勢克男氏を下鴨のお宅に訪ねた。けれど柳先生同志社兼任のかけには、能勢教授もあずかって力のあったことを誰かから聞いていたからである。

下鴨の森近く、樺の大木が亭々と聳え立った能勢邸の、ほどよくしつらえられた涼しい二階のベランダで、民芸の話をするのは、時と処を得たように思えた。三人の話は、主として京都や同志社における民芸の懐古談であったが、当時の苦しみも、笑いに交

わるような和やかさで、あるいは水のように淡々と、時には激したりすることもあって、興味深い会話となった。私が司会役のような形となり座談は録音された。

能勢「私が柳さんを知ったのは、私の妹の松岡道子が、東京女子大学の第一期生として柳先生からも教わり、たいへん可愛がってもらっていたので、妹らに連れられて東京青山高樹町の柳さんのお宅を訪ねたことからした。私は大正八年東京大学を出たのだから大正九年ごろかな。柳さんのお父さんの家は立派な家でした。そのとき柳さんから、茶碗や沢山の猪口を見せられたんだな。家や親戚でも見ていたものの、こう柳さんから言われてみると、何と美しいものだなあ、と思えました。木喰さんの像も二、三体あって、柳さんは木喰に傾いているときでした。僕もその直後、柳さんと一緒に書きましたよ、何か雑本に……」

西耶「先生は我孫子へは、いらっしゃいますんでしたか」

能勢「我孫子へは柳さんが東京へ戻られて田中耕太郎さんが住まわれてから行ききました。柳さんがいたころだったら、リーチや富

本憲吉さんなんかもいたんだから、きつとももしろかったと思います。大学を出ると私は、大阪の実業界に入ったが、おもしろくなくて、学校の先生になりたいと思ったので、そこで大正十年、海老名さんの紹介で、同志社大学の講師となり、京都に住むようになりしました。大正十一年ごろだったかな柳さんに手紙を出しましてね、京都のおもしろいことを知らせると、柳さんも実は自分も行きたいと思っているといてよこしましたよ」

西耶「白樺の志賀、武者小路先生らも我孫子を去られたという時代ですか」

能勢「そう、その頃、志賀さんも奈良に行くという気運もあって、古い日本に対する何か芽生えのような憧れができたところで、柳さんも、もう東京にあきあきしている有様でした。しかし、京都へは、何も定職がないで行くのも心許ないから、君が同志社にいるのだから、何か神学部あたりに、とっかかりがないか、というようなことでしたよ。私も柳さんが京都へ来てくれたらよい、と思ったので、当時の同志社大学文学部長の芦田慶治さんの家が近いので、時間講師でもいいから、柳さんに来てもらえないだろうかと言いました。

その時芦田さんの言うことには、同志社は、ひからびたようなところで、決った型の先生よりとらないのでね、私もやりにくい。だから、柳さんのような人に来てもらって、学外からの遊撃手のようなかたちで、自由に批判してもらったらおもしろいだろう。私も何とか考えてみましょう、とのことでした」

西耶「その頃芦田さんは、柳さんの白樺や宗教についての書物は、既にお読みになっていたのですね。そうでないと話にはなりませんからね」

能勢「柳さんのキリスト教に関する書物は、もちろん読んでいたと思います」

能勢「その後、和田琳熊さんが部長になったので、やはり和田さんにも柳さんのことを話すと、フーンとか何とかいって煮えきらぬ返事でした。そのうち関東大震災があり、同志社の方でも話しがだんだん熟して、柳さんを女専（現在の女子大学）と、大学では英文科の講師として、お迎えすることになりました。神学科では、何でも連続講演というような形で、先生のフリーな宗教批判とでもいふべき講義を聴いたのではなかったかと思えます。大学英文科では、キリスト教神秘思想

や、イリアム・ブレーク、ホイットマンなどの講義があり、名講義だったそうですね」

西耶「法学部でも柳さんの話をきいたのでしょう」

能勢「そう、宗教哲学の話で、水遠の今〴〵というのをきいたことがあります。あれは柳さんのお得意のところだった。法理学の恒藤恭君や社会的キリスト教の中島重君、それにもっと前には今中次磨君らもいて、柳さんの話を熱心にききましたね。中島重君でしたか、柳さんに対して、哲学を宗教の中から批判したのでは批判ならぬとか何とかいって、二人がうまくいかないで、ガタガタしたことを覚えています。それにしても私は、柳さんが確信に満ちて、毅然と論駁したことや、マルクスなどの説には、自分ももっと勉強してゆきたいという謙遜な態度にも感心しました。そして、たしか僕が柳さんにハーリンの唯物史観を貸してあげたら、これはおもしろいから僕にくれる、とかいったこともありました」

西耶「女専では、松田道さんが校長で、デントンさんも元氣なときでしたね。美術や工芸の好きなデントンさんは、柳さんが好きで

よく食事招かれたことをきいています」

能勢「女専の英文科は、上田敏、厨川白村、柳宗悦、心理学の松本亦太郎先生など、多士濟々でした。それに柳夫人の兼子さんも音楽を教えておられたのですから、あの頃の女専の生徒は恵まれていました。あの頃だったかな、朝鮮を愛していた柳夫妻の肝入りで、朝鮮旅行などして、女専生徒達は、柳さんから大きな影響を受けました。大学では、神学科と哲学専攻の村岡景夫君などが、早速柳さんと親しくなり、柳さんにくっついていました。たしか村岡君が文学部の助手か講師のホヤホヤのころでした」

その頃、柳先生は吉田神楽岡、後に下鴨膳部町に居を構えられたが、同志社で教えるかたわら、数多くの宗教や美術、工芸に関する書物を出版し、同時に全国各地を旅行し鋭い眼力をもって、前人未踏の民芸雜器蒐集を拡大して行かれた。また民芸協団設立をも試みられるなど、その旺盛な活動ぶりは驚嘆に値するものであった。当時同志社予科生だった私は、好んで柳先生の宗教書などを愛読したが、中でも昭和三年、ぐるりあ・そさえて刊行による「工芸の道」を手にしたときの感激

と喜びは、いまだに忘れられない。同志社の今のアーモスト館の地に、昔の東寮があった、それを使った英文科の古い教室のそばを、柳さんが通っておられたのを覚えていゝる。音楽を好んでいた私は、兼子夫人のシュベルトやシューマンあたりのドイツイールドに感心していたし、また親しく指導もうけたが、宗悦先生と懇意になったのは、それから後のことである。兼子夫人がドイツイに留学され、暫らくして宗悦先生がハーバード大学で東洋美術の講義をされたのも、私の予科から大学へかけての頃であらうか。

### 三

話しは前にもどるが、柳さんが東京において白樺同人となり、ブレイクの言葉を誌し、宗教の理解や奇蹟について著述され、朝鮮の美術や、陶磁器にその愛を寄せ、木喰上人に情熱を傾けておられた頃、河井寛次郎先生は、すでに京都五条坂に居を構え、日本を代表する陶磁界の巨頭となっていた。先生の鐘溪窯時代である。

黒田「柳さんに出会う以前から、河井さんの名は天下にとどろいていましたからね。今

の間国宝級じゃないんですよ。朝日新聞だったかな、若冠三十歳の河井さんを『生ける国宝』と呼んでいたのです。何しろ他の連中は、桁が違っていったんだな。あの人は特待生ですよ。高島屋の川勝さんや、黒板勝美博士をはじめ多くの名士が河井さんを後援していったんだ。楠部弥一だって、八木一草だって、死んだ河村喜太郎だって、皆河井さんが先生だよ。六兵衛の窯も河井さんの指導だ」

西耶「ところが、その河井さんを叩いて、批判したのが、柳先生というのじゃないですか」

能勢「そう、そうなんです。あれは新聞か雑誌かなにかでした。柳さんは当時僕に、河井は、イミテーションの大家だよ、というようなことをよく言っていました。まだ自分のものをもっていない、というような意味なんですよ」

黒田「河井さんは、若い頃から唐や宋、元明等の多様な技法や釉薬の研究をうんとやっていた人なんだ。そうしてそれらの復元、いやそれ以上のことが、容易にできるんだからね。まあそういうことを、河井はイミテーションの大家といっただけではないかな」

能勢「そうなんだ。河井さんという人はできるんだな」

黒田「そうですね。だいたい日本陶磁器界で宋代青磁というものができれば、もうこれで一人前なんだな。皆がやっているのはその程度だ。柳さん式に言えばイミテーションですよ。それが河井さんとなると誰もできない絶妙が、青磁の中からポーポーと出てくる。宋なんぞはふみこえて、唐の二彩や三彩が出てくるんだよ。みんなあれよ、あれだよ。とんでもないすばらしい窯変や油滴にたって河井さんにしてみれば何でもないんだ」

西耶「奥田誠一氏あたりが、陶磁器界に彗星あらわる、といったのは、その頃のことでしょう」

能勢「そうですね。ところが、その河井さんに、いまあなたが言ったように柳さんが一矢を酬いたのです」

黒田「何でも河井さんの鐘溪窯展で、皆がヤンヤン言っていたころ、一方、柳さんは東京神田の流逸荘といったかな、なんかそんな画廊みたいなところで、李朝陶器の会をやっているんだね。柳さんに批判された河井さん

にしてみればだ、批評家なんていう者は、そりゃ何でも言いたいことは言うんだから、その柳という人の蒐集している陶器を見れば、その人がわかるといふわけで、その展覧会場へ出かけたんだね。そして、すぐうたれたんだよ。おまけにその会場の真ん中に、これは俺が作ったんだぞ、といわんばかりの柳さんが、ドッカーリ坐っていたというんだ……」

(笑)

黒田「この話しは、僕は河井さんから、はじめの中は何度もきかされたよ、もう晩年には言わなくなったがね。まあ、あの時が柳・河井の初対面ではないか。しかし、その時河井さんは話しをかわさず、さっと帰られたそうだ」

能勢「その辺から、人々から絶賛されていた河井さんの沈黙がはじまるんだな。大方向転換とでもいうか、河井さんは、その後浜田さんの紹介かなんかで、東京の柳さんの宅を訪ねておられるね。何しろ木喰の仏像や下手物の美しさにとりつかれてしまった河井さんは、何だか酔ったようになっていた。よろこびとともに、自己脱皮の苦悶をなめていたんだね」

西郷「その辺が河井さんの偉いところですね。その頃、英国でリーチとともに勉強しておられた親友・浜田庄司先生の帰国をたいへんに待たれたわけですよ。浜田さんの「河井を憶う」という追憶文には、——大正十三年春、私が英国から四年振りには河井の家へ帰って来たとき河井は、待っていた、待っていたよと、仕事もやめて、朝から晩まで話しつづけた……」というのがありますね。柳さんに共感できた河井さん、浜田さん達が、いよいよ兄弟以上の親交を重ねて行かれる、すばらしい有様は例えようもありません」

河井先生は、柳先生の追悼号に、弔詞として、「トウトウ逝カレテシマツテヤリ切レナイ、次カラ次ヘツキナイ思ヒ、カナシイカナシイ」という詩のような言葉を書き、また別稿には、——その頃、私は柳の熱中しているその仏を見て、自分の心と柳の心が、しっかりと結びつくのを感じた、という一節がある。民芸運動というのは、実はものを中心に動いているが、不思議にも美しいものを通じて、相互の心が堅く結ばれてゆく運動であることを感ぜざるを得ない。(次号につづく)

(昭七大法卒・香里中高教諭)

(六十三頁からつづく)

半透明の乱雲文様のグラスが発明された結果、ステンドグラスは赤や青の強烈な色彩から一転して、中間色の豊かな色彩に変わったために、再び勢力をもち返してきたかにみえた。

現在、日本でみられるほとんどのステンドグラスは、この系統に属するものになった。

日本でキリスト教会が自由に建設されるようになってから、まだ百年にしかならない。

だから、日本に十一・二世紀のヨーロッパ・ステンドがはいってないことは、致し方もないことであつた。

そして、そのために、ステンドグラスが、キリスト教々義の本質を示しているということが理解できなかったとしても、やむを得ないことであつたかも知れない。

しかし、ステンドの本質がやっと理解された今日、そのようなステンドが一つや二つ、日本にもできない筈はないというのが、私の切なる願いなのである。

(工芸家)

# 祇園会「鷹山」の新史料

富井康夫



展・安定した規模であったと思われる。

しかし、近世における比較的固定化した山鉾巡行について、その経済基盤・運営のあり方・当町民の維持能力と負担処理のしくみなどといった点の研究は、戦後では皆無といってよい。

たとえば、乱世の明応九（一五〇〇）年復旧した山鉾の数は三六基。それらは一年にわたる戦乱と頽廢・火災によく耐え、近世における巡行規模の基礎をなしたが、延宝二（一六七四）年にはすでに三三基に改廢されている（林恕『祇園山鉾考』）。これが現行の巡行のもっとも近い原基であって、おそらく近世初頭（あるいは林屋氏のいうように寛

京都祇園会の山鉾巡行は、文献的には貞観一一（八六九）年から現在まで、途中応仁・文明の乱で二九年間の廢絶があったとはいえ、千百年余の命脈を保ち、いまなお京都市民、とりわけ鉾町の人々の手で伝え、守られている「まつり」行事である。

ところが、その山鉾巡行の維持・運営の歴史、巡行のために費やされた下京の町衆たちの労苦の歴史は、意外と研究されてはいない。わずかに、林屋辰三郎氏の有名な講話「祇園祭について」（東大出版会刊『祇園祭』所収）が、その濫觴を語るのみである。そこ

には祇園会の發生たる疫神牛頭天王の迎祀鎮魂から御霊会への展開が述べられ、作り山や鉾が猿樂法師や犬神人に支えられながら、中世民衆文化の結晶の一つである風流・狂言を吸収し、さらに一方では、中世末期に發展してくる下京の商業店舗およびそれら町衆の自治組織たる町組の経済力などを背景にして、巡行がまさに「古代から封建社会を打ち出すまでの、民衆の総力の結晶として、実に現代に伝えられた記念碑」となりゆく姿が、いきいきと描かれている。

『祇園社記第十五』の「祇園會山ほこの事」にみえる「応仁乱前分」の山鉾五八基は、この山鉾巡行の中世におけるもっとも発

永のころ）町組の整備・幕藩的商品流通の安定と成長・平和の到来などともに固定されたのであるが、その幕末までの運営状況となるとわからないのである。むしろ、それらを実証する史料は各鉾町ごとに断片的であり、数量も乏しく、また数年前までは調査の努力さえもはられなかったといつてよい。

前置きが少々長すぎたけれども、近く同志社大学人文科学研究所で発刊しようとする史料集「祇園会鷹山関係史料」というのは、応

仁乱以前より存続し、近世を通じて毎年旧暦六月十四日のいわゆる後祭りに巡行した最大の曳山「鷹山」に関する第一次史料の集成である。そして山鉾固有の近世史料の公刊は、おそらくこれが最初のものであろう。鷹山は元治元（一八六四）年の鉄砲焼けて飾人形三体を残して廃亡したけれども、その史料はいまなお山を守り育てたときりと営みを知らせてくれるのである。

小稿では、その収集・整理刊行の過程を明らかにし、あわせて主な史料の一部を紹介して、史料集利用ならびに諸兄の京都研究の参考に供したい。

## 二

同志社大学人文科学研究所第二研究（日本封建制研究会）では、十数年前から封建村落共同体の綜

合的研究を企図し、地域農村の調査・史料収集・研究業績の公刊などを精力的に行ないながら、日本固有の封建社会像の追究と再構成に努めてきた。研究分野も、農村

構造史・農業経営史・商品流通史から土地制度史・共同体論・家族など、社会生活と文化ならびに地理的考察を含む多岐にわたっており、すでに京都府内である丹波国桑田郡馬路村および山国村の研究成果は、二冊の叢書（「近畿郷土村落の研究」と「林業村落の史的研究」）となつて、人文科学研究所より刊行されている。

ところが、山国村研究が一段落し、つぎのフィールドを求めなければならなくなったとき、まず研究員諸氏の頭に浮かんだのは京都市中、町方の社会経済研究であった。つまり「封建社会内部における都市と農村の構造的・史的連関」の追究が問題となり、以後この点から日本封建社会の全体像に迫っていくことになった。具体的には京都町方の諸側面を「家の構造」「町組の構造」「町方経済の展開過程」などとまとめて、中世から近世まで一貫して追究するというのである。

さしあたり、史料蒐集をといふことで町方史料の探訪を考えていた際、第二研究のメンバーでもある文学部の秋山國三教授から、かつてその一部を労作「公同沿革史上巻」に利用されながら、いまは自宅の納屋にねむって



（「祇園会山鉾細記」所収）

いる「三条衣棚町文書」を利用しないかと声がかかった。

この「三条衣棚町文書」というのは、もと衣棚町の町有文書として町会所土蔵に保存されていたもので、秋山教授が以前同町居住であったことから、仮りに整理し移管されていたものである。第二研究では絶好の素材だとさっそくその寄託をうけ、昭和四十三年の夏季休暇を利用して、文学部学生数人を含めて、人文研・女子中高講師・黒田紘一郎氏、仲村研研究員と小生らが集中的に整理に当たった。その結果、この文書は、総点数一万余点にのぼる膨大な町有文書群であることがわかったのである。

このなかには、江戸初期の町政・町財政・町共同体の自治規制の一斑を示す寛文期の「万覚帳」、若干の欠落はあるが正徳以後かなり詳細に収録・保有された「御触書留」、天明以後連年八〇年におよぶ衣棚南北両町の「宗門改帳」など、独立した価値の高い多くの文書を含んでいるが、じつは「鷹山関係史料」もその一部として発見されたものであり、衣棚北町が、鷹山を管理し、運営する当町であったところから、これらの史料が残

存、継承されたものである。

第二研究では、秋山教授の意見もあって、この貴重な史料をわれわれだけの利用ですませるのではなく、広く一般に公開し、京都研究を志す諸氏の利用に供すべきであるということになった。そしてそのきっかけとして、もっとも研究進度がおくれている、且つ京都の文化と伝統を反映し、その意味で社会的関心も高い史料、また今後われわれの研究のための共有財産としても役立ちえて、史料価値も高いものを、翻刻刊行しようということになり、祇園会山鉾の鷹山関係史料がえらばれたのである。

そこで学内もいよいよ騒然としてきた四四年三月から、研究所の一室で筆写をはじめて七カ月間、その間、黒田紘一郎氏や文化史専攻学生の木村恭子氏の援助もうけながら、ようやく上巻の刊行にまでこぎつけた。

文書総点数一四〇点、刊本にしても上・下三〇〇ページをこえるものであるが、「三条衣棚町文書」の中の鷹山関係史料をすべて網羅しており、他の鉾町史料とあわせて総合研究を行なっていくためにも充分耐えうるものであろう。ただ孔版であるため、発行部数も

少なく、諸般に不都合があることを恐れている。

### 三

さて、この史料集の特徴は、量的に多いというだけでなく、なによりも現在『祇園會組記』『祇園會山鉾由来記』などの刊本でしか知られない鷹山のほぼ全貌が知られることである。とくに、当家神事・山飾りの形態構造のほか、地ノ口米・山鉾の修復過程・寄付や講の仕組みから、神事当町の費用の収支など、運営・管理の経済的側面が集中して考察できることである。

まず、この史料でもっとも古いものは享保八（一七二三）年六月一日の「車座利兵衛鷹山からみ請取手形」である。

前記『由来記』によると、鷹山は「鷹狩の体を風流に作りなしたるもの」で、中納言平と伝承される鷹匠や犬遣い、大粽を食い食い樽を背負って従う樽負いなどの人形に趣きがあるが、当時最大の屋台であったらしく、この山建てには非常な労働力を要したのもらしい。（「山からみ」とは、山建ての総称であったらしいが、安永ごろにはこの用語は消え

る。)

「

請取申鷹山からみ之事

一 当十一日二山からみ可申事

但し四条道場道具共其当町へはこひ可申事

一 同十四日山つな引手三拾八人

外にきやり 式人

つなもと 六人

以上四拾六人也

但し廿才より五十才之者出し可申候成

程達者成もの出し可申候

一 同日山くずし何れもはこひ可申候尤十五

日ニ四条道場に持はこひ可申候事

右之雑用銀四拾匁ニて請取申候、山からみ以下万事念ヲ入可仕候(以下略)

簡潔な契約書である。史料の集中年代が天明期・化政期・天保期に集中するにもかかわらず、この種の契約文書が古くから残存し、

文政期までつづいているのは、山建て專業者・熟練者の把握や、契約方式の継続の必要のほか、山鉾巡行の途中に予想される事故を防ぎ、御渡を整然と成功させるには、大工方・手伝方・車方の協力と技術と、これらの山渡

りについての心意気とが、よって力となったためであろう。「先規之通り」とよく表現される意識が、領主のものとはちがって、ここではこのような団結の意志を伴うものとしてかためられていたといえはいいすぎだろうか。

つぎに山の解体後の保存処分はどうだったろうか。「四条道場へ持ちはこぶ」とあるのはおそらく木組・屋台・道具類のみをさすのであろう。年代未詳の「鷹山諸道具預帳」をみると、見送り箱は「野杓や吉兵衛」に、天水引箱は「千切屋吉右衛門」に、天幕箱水引箱は「千切屋治兵衛」に、総角箱は「夷屋伊兵衛」に、衣裳箱は「井筒屋徳兵衛」というように分散して預けられ、人形の首や手や鷹・犬・雉子など付属品のみ、会所蔵に入れている。そして面白いのはこの史料で、鷹山の木組構造がほぼわかることである。

「家墓之部」

一 上棟 表家墓 壹本

一 同 後小 式本

(中略)

一 家根 表 八枚

一 同 後 六枚

(後略)

断片だけ書抜いては理解されないかも知れないが、この史料ではさらに組立道具(てこ式本、貫十丁、すじかい八丁など)が詳しく列記してある。最近鷹山の復旧の噂を随所で耳にするが、もし今後そういう試みでもなされるならば、これはその技術的な手がかりとして充分有効であろう。

つぎに、地ノ口米と寄り町に関する史料をみよう。天保二年および一四年の「神事地ノ口覚」などである。

地ノ口米とは、町民が軒割りで拠出する巡行のための費用負担で、応仁乱後の復興に端を発し、近世では銭から米に変わっている。山鉾の趣向が固定し、町組組織が整備されてくる天正の末ごろから、山鉾町のみ地ノ口負担では賄えないので、地子免除に対応して、下京の氏子町を、寄り町に編成して、山鉾運営の負担に参加させたと考えられている。

鷹山の地ノ口米高と寄り町とは、今までどの記録にも不十分であつたらしい。福井秀一氏『近世祇園祭山鉾巡行志』の作表では、地ノ口米欄が空欄の山鉾七基、その中に鷹山も入っている。しかも寄り町が「十ヶ町」とい

われているが、この史料では角家を加えて一  
二ヶ町（所）であることが明らかとなった。

「

地之口

三条通新町東入

鷹山町

米四石五斗九升八合

銀五拾目

此内訳

米貳斗五升

寺町三条上ル

天性寺町

同貳斗五升

寺町姉小路上ル

下本能寺町

同貳斗

寺町御池上ル

上本能寺町

同貳斗

寺町押小路上ル

妙満寺町

同貳斗

御幸町押小路上ル

山本町

同三斗五升

御幸町御池上ル

亀屋町

同三斗五升

御幸町三条上ル

丸屋町

同貳斗五升

御幸町姉小路上ル 大文字町

同壹斗六升

三条 新町東南角

同八升八合

三条 新町東北角

銀五拾目

三条新町西入ル 釜座町

米貳石三斗

三条新町東へ入南側 衣棚南町

四石五斗九升八合

銀五拾目

右之通御座候以上

（以下略「天保十四年閏九月地ノ口米覚」）

では、これらの神事費用の収支はどうであ  
ろうか。元文四（一七三九）年より文化一一  
（一八一四）年まで約七五年間つづく「祇園  
會入払帳」がそれを語ってくれる。代表的な  
ものとして元文五（一七四〇）年分をとって  
みよう。

「元文五年申六月廿七日

寄町地ノ口米入

時之相場七拾四五匁 三拾五匁かへ

一 百五匁

釜座町 三石代

一 壹匁五分五毛

同断 藤屋 四升三合代

一 五匁六分

同断 七文七屋 壹斗六升代

一 壹匁五分五厘五毛

同断 玉屋 四升五合代

一 百四拾六匁

残り米 貳石代 七拾三匁かへ頭屋へ入

一 四拾貳匁四分五厘

同断 藤兵衛へ入 同米六斗五升代

一 貳百四拾八文

四軒分六拾文ツツ 借屋衆へ 十四日けいこ人足代

一 三百拾貳匁貳分三厘

申六月払方

一 三匁

山村新右衛門 御神樂

一 百文

一 五拾五匁

一 五百文

一 壹貳百文

一 代廿四匁六分

一 八百五拾文

一 代十七匁五分

一 手伝平八

一 同人馳走代

一 泰 壹本



整理された鷹山関係史料  
(三条衣柵文書)

- 一 八拾八文 内 拾一把かへし 同人
- 一 代耆奴八分五厘 中なわ 四東
- 一 式拾文 同人
- 一 代五分 けせうなわ 五わ

- 一 八奴八分 素麵三拾五把
- 一 五分引
- 一 四百七拾式文 百文に四奴かへ
- 一 代九奴八分 笹屋近江
- 一 一 粽 廿把
- 一 一 壹貫七百七拾四文 同断 粽屋道和
- 一 一 代三拾六奴三分五厘 七拾五把
- 一 一 耆奴六分かへ五分引
- 一 一 五拾式奴八分 菱屋弥兵衛
- 一 一 八奴六分 酒三斗三升
- 一 一 四奴三分 四条道場礼
- 一 一 式奴 笛吹へ礼包
- 一 一 当年者両家を参り候ニ付申遣ス 同断
- 一 一 耆奴五分 橘屋喜兵衛
- 一 一 式奴耆分 たいこ直し代
- 一 一 四百八拾文 吉もんじや与兵衛
- 一 一 代九奴九分五厘 生のふ五拾目
- 一 一 五拾五文 同断
- 一 一 代耆奴式分 らうそく代
- 一 一 四奴八分五厘 七文じや
- 一 一 重長嘉兵衛 水なわ代
- 一 一 釘いろく
- 一 一 六奴式分 大坂屋市郎右衛門
- 一 一 八奴六分 材木代
- 一 一 三奴式分 大工式入手間
- 一 一 式百文 砂糖巻斥
- 一 一 代四奴耆分 引初棒者十人
- 一 一 六百六拾四文 十四日棒者八人
- 一 一 代十三奴六分 門洗
- 一 一 六百八拾八文 会所すくはらい日
- 一 一 四百文 用
- 一 一 代八奴式分 右飯料
- 一 一 百三文 祇園會小遣いろく
- 一 一 式奴四分 酒 耆升五合
- 一 一 三奴八分 燈油 耆升
- 一 一 百文 茶代
- 一 一 代式奴五厘 かしの木 耆本
- 一 一 式拾四文 酒 式升
- 一 一 代五分五厘 算用寄合ノ時
- 一 一 三奴式分 木炭代
- 一 一 式拾文

代四分五厘

一 式百四拾八文 祇園初尾

一 代五匁貳分

一 百貳拾七文 因幡薬師二面

一 代三匁四分 車屋寄合ノ時入用

一 拾毫匁 丁字屋越前

一 三拾七匁八分 やうかん代

一 七匁九十三文 貝や十兵衛

一 代十六匁四分 十一日十二日入用

一 七匁九十三文 同人 同断

廿七日算用入用

一 三拾毫匁六分 同人

同断

一 五百七十文 同人

一 代十一匁八分

一 四百四十六匁五厘

一 一

やや冗長になったが、当時の収支を明らかにすることは、運営の実態や、習俗、あるいは商取引の状況をも示すことになるので、あえてかかげた。紙数の関係で詳説できないのは残念だが、ともかく元文五年で、すでに一三三匁八分二厘にもぼる赤字がでているこ

とに注意したい。支出の三割は補填されていないのである。これが累年いかに変化し、いかに運営に影響するか、その処理はどうかなどはぜひ研究せねばならない課題である。

#### 四

このように、鷹山関係の新史料は、鷹山の米という制約をもちながらも、近世後期の山鉾運営の実状を、呈示してくれた。史料集ではこれらのほか鷹山の車が、七日船鉾（現在の船鉾）と同じもので、交わるがわるに使用し、修理費も折半していたことを示す史料など興味深いものが散見される。

そして当の鷹山は、文政九（一八二二）年、巡行の途次破損する。「鷹山破損ニ付諸方掛合等扣書」には「當神事十四日、東洞院三条が大風雨ニ而山木柄切類、人形とも破損致、容易ニ修復難出来相見へ候得共、先其儘例之通山仕舞取納メ置申候」とあり、その後修復巡行した形跡はなく、そのまま元治の焼失にあつたのである。慶応年間「京師之美観」のためを意識して復旧にとめるけれどもついに成らず「まぼろしの山鉾」となり果ててしまった。

まとまらない論考となったが、ここではごく手みぢかに、刊行途次の史料集から、鷹山の基本的なあり方の一端だけを、なまの史料を中心に紹介してみたい。

後ほど、詳細な「鷹山研究」の所論を公表したいが、さしあたり、この史料集の完成へのご支援を期待するとともに、ひろく先学の先輩、父兄等校友の方々に、未発表の山鉾史料の所在等ご存じの節は、ご紹介していただくことを期待している。

古都京都の文化を守るといふことは、言うに易く、行なうにはあまりに地味なことでもある。が、これだけは、京都で生れ、育った史学研究者の一つの責務だと考えている。

（人文科学研究所嘱託職員）

